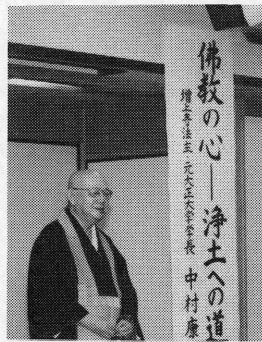


佛教の心——浄土への道——

中 村 康 隆

(増上寺法主)



御紹介に預かりました、中村でございます。

上田先生から何でもかまわないから、「少し話をしろ」と言うことでございましたので、

位の短い話でいいということでもございましたので、それやお引き受けしようというって、与えられたこの題で話をいたしましたので、そんな話でよければとお引き受けを致しました。

本来なら仏教福祉の話をしなければ申し訳なかった、ここへ来て、実は後悔したことでございますが、まあ仏教福祉の原点と申せば、やはり自分自身の幸せの道を歩むということだろうと思います。

お釈迦様の最後のご遺誠とされます

「自らを灯明とし、自らを拠所とし、法を灯火とし、法を拠所とする」というお言葉があります。この灯火というのは、原典の言葉では近頃は「島」と訳しておりますが、

それならば、この間アメリカから牧師さん達が、まあプロテスタントが主でございますがカトリックの方も混って、二百数十名、日本に来るから「仏教の心」という題で簡単に仏教全体を見通して、そして浄土宗のお話を、一つしてもらいたいという話がありまして、通訳をまじえて、一時間のうち二十分が質疑応答で、あとの四十分だから二十分

島というのは、荒海の中に浮かんでいる島の上におれば荒海の中に溺れる事もないわけで、そういった意味では、抛所と訳した言葉と同じような意味をもっていると思います。が、灯火というものも考えてみますと本来に芯のないローソクでは燃えません。これは私の先輩、一味会の中野剋子上人のおっしゃった言葉でございますが、芯のないローソクは燃えない、芯がなきや単なるあぶらみのかたまりでしかありません。人間にも、そのような人がたくさんいるように見受けられるわけでございますが、本当の人間となるには、信仰という芯をしっかりと持つことが大切だろうと思います。そういった意味でいえば、仏教の心についてお話することも、仏教福祉の原点についてお話することになるかと思ひますので、この題でお話することをお許し願いたいと思ひます。

私は駿河の清水次郎長で知られております清水港の生まれでございます。しかし、どうも港町だからというのですが、本当は千葉県の方で生まれた方が似合っていたんじゃないかと今でも思っておるのですが、千葉県のように鮎子(調子)っぱずれで、私は歌なんかとっても歌えない、近

頃のように飲み屋に行きまして、それから喫茶店でもカラオケがあつて歌つたりする歌声喫茶という風なのが流行っている時には、私はかなわん。何か歌いなさいと言われても私は絶対に歌わない。私は歌の方はダメだと、こういつているんですが、しかし歌を聞くことの方は好きでございます、近頃の流行の演歌、「他人船」でございますか、大変洒落た事を歌っております。

「あゝ、この黒髪の先迄が、あなたを愛しているものを。」。二番目は何んか「指切りの指までも、あなたを愛しているものを。」と言うような歌でございまして、これを歌えと言われても歌えないのでございますけれど、こんな文句(の歌)は昔はなかったんで一遍も言ったこともなければ、聞いたこともなかった。この年になって、まさかそんな齒の浮いたようなことも言えないし、もう人間の仲間を抜け出してしまつておりますんでございますが、さて、その言葉で本当にこの私の髪の毛の愛しているのは人様であらうか、そうではないんじゃないだろうか、自分自身をこそ寧ろ愛しているのではないだろうか、そういったことを思つたわけでございます。本当にこの黒髪の先が、愛し

ているのは、他人ではなく私自身であつたというそのことの思いが、強うございました。私はもう八十になりますから、職掌がらもう髪の毛もいらないし、また爪の先ものびなくてもいいんですけれども、毎朝、髪の毛を剃っております。それから毎週一回位指の爪を切っております。もういらないんですね。いらないのに生えてくる。どうして、そんなに髪の毛はのびようとするのか。いらないのに髪の毛はのびようとする、爪の先ものびようとする。一体その力はどこからきたのか、何のためにそういうことになるのか。むろん、私を守るためではないだろうか、ということをお思つたのでございます。毎朝剃っておりますが、頭を剃るようになりましてから、一つ気がついたことは夏の暑い日の炎天下に、このままではかなわないと思つて帽子をかぶりますとかえつて蒸れてたまらない。冬でも蒸れる位でございます。髪の毛があるということは、夏は頭を涼しく、冬は頭を寒さから守ってくれている、やっぱり私を守ってくれている、そういう力が髪の毛の中にある。髪の毛ばかりではありません。私達のすべての物、私達の細胞の一つ一つの中に私を生かす強い力があるということに気がつか

ざるを得ないのであります。そのような髪の毛の一筋一筋の中に尊い私を生かす力が、それが働いているんだということに気がつかざるを得なかったのでございます。つまり私の身体の中には、私の三十五万億とか、四兆もあるという方がありますが、この無数の細胞の一つ一つの中に、私を生かす力があるということでございます。この強い力、一体それはどこから来たのでしょうか。そのことを考へたいと思つたのでございます。外国の人でございましたので、私はその時に新約聖書のマタイ伝にあります、イエスの言葉をひいて、お話いたしました。「汝髪の毛、一筋だに白くし、また黒くしあたわねば」と。誰が自分で自分の血液の流れを止めうるでしょうか。あたしの胃腸の働きを止め、肺の呼吸を止めうるでしょうか。誰もそれはできません。そのような事をしたら、忽ち死んでしまいます。そのような事はできないから、ありがたい。呼吸は、多少の短い時間、止める事はできますでしょう。しかし私が休んでいる間でも、あたしの肺は呼吸をし、あたしの心臓は動き、血液は流れ、そうして胃腸は働き、そうして呼吸の中で肺は空気の中の酸素を取り入れて、そうして必要な窒

素を吐き出している。血液の中では血液は五十一億本もあるという毛細血管が隅から隅まで栄養を送って新陳代謝をして下さっている。私の五臓六腑のすべてが、このように私を生かすために絶え間なく働いてくれているのであります。中野昶子上人という、先ほど、ローソクの芯のないのは燃えないとお教えになりました、中野昶子上人、中野善英上人、三重県の津島に一味会、(一つの味の会という会)をつくられました方でございますが、中野善英、昶子上人といいますが、この方は、「あなたは、あなたの心臓の鼓動を止めていことができますか、あなたは胃腸の活動を止めることができますか、もしそれができたら死んでしまう」とこういって詩っております。働くことが生きている者の印なんだといっておられるのでございます。本当に私の心臓や肺臓ばかりではありません。五臓六腑のすべてが私を生かすために絶え間なく働いてくれているのであります。いな、そればかりではありません。私の身体を形作っている無数の細胞の中にも、又無数の原子があります。一つの細胞の中にも何千何万という数の原子があります。またその中に、素粒子といわれるものでございましょうか、

電子、陽子、陰子、あるいは中性子、あるいは原子核といったようなものが、無数にあるわけでございますが、この無限なもの働きによって私は生きているのであると、そのことに目を向けなければいけないのではないだろうか。この無限なものの中に、驚くべき無限の力が、実は込められている。新陳代謝を繰り返しては私を生かすべく働いてくれているのであります。

近頃、念佛の詩人といわれております、本年八十三才になります、榎本栄一という老人。東大阪におります、真宗の信者、門徒でございますが、この方の詩に「老いさらばえし我身の無数の細胞、今なお新生しつつ、うまず働いてくれるようです」と詩っております。又「この目と耳と五臓六腑、衰えながら、みな懸命に私を支えてくれておる」と詩っておりますが、誠にその通りでありまして、私のような、もうすでに老年になったものですら、私のすべてが、私を生かすために働いて下さっている。誠にありがたいことでございます。しかし、その力は、果たして誰が作ったのでしょうか。私が作ったのでしょうか。その事を深く考えなければならぬと思います。イエス・キリストの言葉

のように、それは私ではありません。私の髪の毛がのびる事を止めることも、白くしたり、黒くしたりすることもできないのであります。それでですからその本当の力、それがどこからきたのか、もし私が作ったものでなかったら、それは誰が作って下さったのか、そこに私達は大きな神仏、大きなみ恵みの力、私達の中にもあるその力の根源を、外なるもの、内なる力を外なる命の力と結びつけて考えざるを得ないのではないかと思います。中野剋子上人は『いかしめたもう、みめぐみのある印だ』と詩っておりますが、このみめぐみにこそ、目をむけるべきであらうと思います。剋子上人は、また「金魚」と題しまして「金魚は水の中にいながら水を知らぬ。いや水の中にいるから、水が見えぬのです。しかも一瞬でも水を離れたら苦しむ。金魚は水の中に生まれ、水の中に育ち、水の中に老い、水の中に死す。水の中に死ねるのも水があるからです。天地に満つる水が、今壇の中の水となって、私を育てていて下さる。ガラス壇の中の水だけを、水だと思ってはいかん。」と、このように詩っておられます。あなた方は、この水を空気に置きかえて考えて下さい。さすれば、この金魚こそ、実は私たち

自身の姿なのではないでしょうか。私は、私をとりまく、掛け替えのない空気の中で、その空気の力によって生かされているのでございます。いや空気ばかりではありません。私を取り巻く天地一切の力、日も、月も、流るる水も、吹く風も、草木土地尽くが、私を生かす命の恵みを賜わっていることに正しく目を開いて気付くべきであります。榎木老人は、また「手ぶら」と題しまして、「私は、手ぶらで、今朝も如来の家へ、あがりこみ、微風をいただき、日のひかりをいただき」と詩っております。私達は如来様の大きな御命の家の中で、そうして生きてるんだということに気がつかないといけないと思います。この私の回りにある天地一切の生きる力。そのことに気がつくとき、私の内なる力もともに、天地一切の生きる力のあらわれと受け取ることが大切ではないでしょうか。

道元禪師は、草木土地共に大光明を放ち、深妙法を説くこと、（深妙法とは深い妙法でございます）、深妙法を説くときまるときなしと『正法眼蔵』弁道話の中で説かれております。また、二宮尊徳も皆さんよくご承知の『声もなく、香もなく、常に天地は、書かざる経を繰り返しつ

つ」と詩っており、そして「心眼（心の眼）を開いてみるべし」と諭さとされております。心の眼を開くならば、そこには天地の大生命が輝いているのであります。禅の道歌に「耳で見て、目で聞くんらば疑わじ、自ずからなるのき（軒）の玉水」とあります。目で聞いて即ち目で見るのではなく、耳で見て目で聞くんらばで、つまり全身全霊をもつて心の目を開き、心の耳を開いて、そうして見るならば自ずから軒から落ちる玉水の中に、天地一切の命の輝きのあることにきずかざるをえないというのであらうと思います。そのようにして、私達は、正しくわれわれの心の眼を開く、心の開眼を大切にしていかなければならないと思います。その『心の開眼』という題で松原泰道さんが、集英社から戒、仏教の戒律についてお書きになった本がございしますが、その中で女流詩人の高田敏子さんが自殺をしようと思つて自殺を思い停まった話を、対談の中で語られたことがしるされております。敏子さんが最後に、女ですからいよいよ今日が最後と思つて念入りに化粧をしました。眉毛をひき髪の毛に当りながら、鏡を見ておや髪の毛のびてる、髪の毛にあたり毛を切りました。また指の爪も切りそろえて

いるうちに、愕然としたということです。爪ものびている、髪の毛ものびている、死を決めているのに、その私を守らうとして、髪の毛はのび、爪がのびていく。私、一つの命で、勝手に生きているのではない、実は守られて生きているんだということに、気がついて、自殺を思い停まったということでございます。

榎本栄一老人の詩に、このようなことばがあります。「どんな人間にも、仏の五劫思惟の、願いがこめられている。ただ私達はそれに気づかない」（無眼無耳人）。私達の身体の中に仏様の五劫思惟の願いすべてのものを生かすべてのものをよりよくしようとなさる、仏様の大きな大慈悲の真心、それがやはり私の中にあり、それが私の髪の毛をのばす、私の爪をのばしてくれているのだと、そのことに目をみひらくべきことが、最も大切なことでございます。それが仏教の仏性論でございます。この私の内なる、尊い力、そこに仏様の性質が私達の中にもあるんだ、そういう仏性論、仏性の説。あるいは如来蔵思想とも申します。この佛敎大学の学長さんは、如来蔵思想の論文を書いていらっしゃいますが、如来蔵即ち、如来様のお力をみんなもって

いるんだという如来蔵思想。如来様のというのは仏様と同じことでございます。すべてのものが如来様、仏様のお力を、蔵しているのだという考え方、そういう考え方も現われてくるわけでございます。その中から山川草木悉有仏性とか、草木国土悉皆浄土という考えも出て参ります。山も川も草も木も尽くが仏様の性質を持っている。あるいは、草も木も国も大気も尽く皆仏となるといった思想になるわけであります。仏教の目からいいますと、生物も一切の物が命あるもの、一切の物が生きているものとしております。これらはバイタリズム、生命論ともいいますが、生命観的な宗教観という風にいわれております。近頃の物理学でも岩や土でも人間でも、その成り立っている根本のものはみな同じであるというところまで今の科学が到達しております。仏教に説いていたことが、すべてまちがいでなかったとわれているわけであります。そのようなことから実は、仏教の縁起論というものもこの如来蔵思想にまで発展をしてきたといわざるをえません。お釈迦様が最初に説かれました「縁」と題します、南伝の「相応部」中のお経の中にも、すべてのものが、たとえば私の今の生活上の苦

しみも生まれてきたからというように原因がある。そのような因縁から物が起こり、その縁起の法によって、すべてが起る。縁起、縁生でしかもその縁は相依性のもの、相関性をもったものだと言っておられます。お釈迦様がお悟りを開かれて、まもなくお説きになったこの「縁」と題するお経の中にはこのような思想があつて、今の山川草木悉皆成仏、一切のものはお互いによりかかったすべてのものが、「縁」の集まりの中で（衆縁の和合と申します）衆縁和合の中に一切のものはあるということ、そういうことを説き、このように天地一切のあらゆる現象悉くが互いに離れがたく、因果關係をもつて結びつき、つらなりを保ちあつて、あたかもすべてが大きな網の目のつらなるように、どの一つの網の目も、他のすべてと関わりあつてゐるという考え方で、それが『華嚴經』にいう蓮華蔵世界の考えでございします。蓮の花の美しさ、それは蓮の花の一片一片の中に、その美しさがもたれておつて、それが互いに助けあつて全体としての一つの美しいハスの花を形作っているように、この世界全体がそのような世界であるという考えが蓮華蔵世界の考えでございます。お釈迦様の自灯法灯、「自

らを灯とし、法を灯とする」教えもこの二つの「自らの内なる灯」と「外なる法の灯」、この二つが実は一つであること「内なる仏」と「外なる仏」の世界の一なることをむしろ説こうとしたものではなかったのでしょうか。このようにしてみますと、私達は実に驚くほど、み仏の大きなお力の中に生かさして頂き存在し得ているということに気がつかざるをえません。榎本老人は、「めがね」と題しまして、「如來からたまわりし、眼鏡をかけると、私のうしろの、功德の大宝海が見えてくる」と詩っております。また「開眼」と題しまして「何ともなしに、買うて食べているもの、眼がひらけば、これみな天地からのいただきますもの」と詩っており、「豆」と題しまして「豆の皮むいていると、この小さなひとつぶに、無辺光仏ムヘンコウブツ（無辺光仏とはあみだ様のことでございます。あみだ様のみ光は、ささぎるものなく、すべてを照して下さっているというその無辺光仏）のおんいのち、はいりこんでいるのが、よくわかる。」と詩っております。私達は実にこの広大無辺なみ仏のみ命の力を頂き、そうして生かされて生き得ているのです。私の中なる髪の毛をのばす力、細胞を動かす力、それはすべて外な



満員の会場風景

る一切をあらしめ一切を生かして下さっている宇宙の大生命の仏様、一切を動かしている仏様のお力のお蔭であるといわざるをえません。

私の郷里は静岡県でございますが、駿河の生んだ最もすぐれた名僧といわれます、臨済禅を説かれました白隠禪師は、いつも「隻手の音声」の話をなさいました。隻手の音声、片手の声でございます。皆様、いたい皆様は片手の声をお聞きになれますでしょうか。片手の声は到底肉なるこの耳をもってしては聞くことはできないでしょう。しか

しながら、もし皆様が心の眼を開き、心の耳をすますならば片手の声を聞きうると存じます。

私が大学に勤めておりました時に、始めての新人生の訓示でそのことを説きました。「諸君は、この片手の声を聞くことができるか。肉の耳をもってしては、ついに聞くことのできないこの片手の声も、もし諸君が心の耳をすますならば、そこにはこの両親の諸君に対する深い深い愛情と無限のどこまでもと願う高い期待の声とがとどろいているはずだ。その声を聞き、その声にこたえることが大学生活の肝心の意味なのだ」ということをお話ししたのでございます。終りまして、新人生の親様やそこに来ておられました同窓会や父兄会の方々は「大変、いい話をして下さい。私達は、自分で自分の子供に、ああいうことはいえないのに。よくおっしゃって下さいました。」とちょうどゲバ、ゲバ学生の盛んな頃でございましたんで大変そのことを喜んでおりましたが「いや、あれではまだ五十点なんですよ。」と話したのでございます。そこには両親だけではなくして、その両親の親様の声も流れていなきゃなりませんし、そのまた親様の声、つまるところ先祖代々の親様の声

が流れているはずであります。私達の先祖の数は、三十年代前で約二十一億五千万弱になります。五十年代前になると、驚くなかれ二千二百五十一億八千何百万という数になります。五十一代ではその倍になります。そのようにしていったら六十代前、七十代前、数を数えることもできないほどの親御様の数になることでありましょう。その総親様達の声もまたこの手の中に流れております。その声に耳をかたむけなくてはならないはずであります。しかしそのようなどころまで気がついて、まだ実は充分ではありません。六十点位しかやれません。先祖様もそれ以前の長い長い間の命の営みの声を頂き、その声もそこに流れているはずであります。地球が生まれまして四十六億年たつといいます。そこに宇宙のどっからか生命の種が芽ばえましてから三十六億年たつ、地球が生まれて十億年たつて、そうして生命が芽ばえて三十六億年であります。それからの永い永い時間にアミイバーができ、生物ができ、動物になり、猿になり、類人猿になり、ついには人類の先祖が生まれたわけであります。それは三百五十万年前という人も五百万年という人も、八百万年以上だという人もあってわかりま

せんが、そのような長い人類の先祖の先祖が生まれてからさえも、気の遠くなるような永い時間がたっているわけでございます。その総親様の数は、本当に数かぎりない命の親様といわざるをえない数でありましょう。又さらにいうならば、この地球と同じ太陽系の誕生、それを取り巻く銀河系の星々、そうした事も考えなければならぬであります。太陽系が四十六億年前に生まれたという銀河系の宇宙は、太陽系のような恒星が二千億個もある星や星雲やまたつぶれた星の死骸の塊であるといわれております。そういう銀河系の中では、毎年十位のお星様が死んだり、生まれたりしておる、そうして直径十萬光年もある、その真中の厚みが一万五千光年とも二萬光年ともいいますが、総体として渦巻く円盤状であるといわれているのでございます。太陽のような恒星の平均寿命は百億年といわれておりますから、太陽系も地球もそのなかに達しているわけでございます。そうして、さらに、その外に一千億もの銀河や銀河の群・銀河群や、銀河の塊・銀河団が百億光年もの長い広い距離にわたって広がっており、中心部の爆発だけではなく観察されないような星雲まででは百二十億光年のもの

まで認めることができるといわれております。もっとよい感度のよいものができればさらに百二十億光年の先の空もあることでしょうけれども、今計算しうる範囲はその位だと申しております。そのような大宇宙の星々は約二百億年前に生成され、その寿命は一千億年とも説かれております。我々の銀河系は、百二十億年前に形作られ、その中心から三萬光年へりの方に太陽系があり、その寿命が百億年だということですがその太陽の九つの惑星の中で、地球だけが水と緑に恵まれた唯一の惑星であることがわかりました。太陽光線と地球の輻射熱との微妙なつりあいがとれており、また両者の距離も適当な所にあり、又質量も適当という風に、すべてが微妙なバランスの上にあり得て、はじめて、このような生命に輝く地球が生まれたといわれます。それから十億年たって命が生まれ、それから更に今日までの三十六億年という長い間の長い長い進化の果てに、動植物、人間の先祖、両親と辿ってきまして、ようやく私が生まれ得たというわけであります。無窮のこの空間の広がりと無限の時の流れの中で、幾多の先載一遇というべき好機・好縁の積みかさなりに恵まれまして、始めて与えられること

のできたこの私の命であります。正しく、不可思議にして稀有な、文字通り有ること難い。ありがたい縁に恵まれえたからこそ、それらの諸々の縁の和合の上に、和合に恵まれ得たからこそ、始めてこの我が身の命、我身の存在も恵まれ得たことであります。本当に尊く、人身受けがたしとお釈迦様のお説きになった通りでございます。そのことに深く思いをいたさねばならないであります。この大宇宙、この銀河系、そして太陽系あつての地球、その地球の山川草木、すべての恵みをうけての動植物の永い永い進化の果てに、生命を恵まれ得た無数の人間の中の両親の出會いということ、これ位不可思議なありがたい縁^{えに}というものはないであります。そのような中から、私ににあたえられた命、如来様のおめがねをかけると私の後の無辺の大宝海が見えると詩いました檀本老人はまた「この命を見ておれば、日や月を動かす、無始無終のエネルギーが、かすかなれど、渦巻いている」といっております。私の中に無始無終のお日様やお月様を動かすような強いエネルギーの力、それが私の中にも働いている。今の天文学でも、地球を含む太陽系、それを含む銀河系、さらにはそれをも含

む全宇宙、いわゆる仏教の三千大千世界の存在というもののありうるのは、その全体を動かす無限のエネルギーののおかげであると物理学者も説いております。物理学者のことですから、その無限のエネルギーの力を物理的な力とうけとっていることでありましょうけれども、果してそのような単純な物理的な力なのでしょうか。この無始無終のエネルギーそれを仏教では、仏様、限らない命の仏様、無量寿無量光、すなわち限らない命と限らないひかり、いいかえれば、限らない時の流れともなる命、限らない空間の広がり^ににゆきわたるところの光の働きとしての生命の世界。その生命の世界から、み仏がすべてをいかし、すべてを展せしめようとする、いわゆる観音様と勢至様とは、あみだ様の根本のお力のそれぞれの面における働きであります。無量寿の働きとしての観音様の慈悲の力、すべてをいかにうとする無量光の働きとしての勢至様の智恵の働き、すべての文明の発達もこの智恵の働きがあつて発達をしてまいつたのでありますから、私達の一切が仏様の観音様、勢至様としての働き、智恵と慈悲との働き、命と光との働きによつて、私達をとりまく一切が存在しえているのだということ

になるのではないでしうか。榎本老人が「どんな人間にも、仏の五劫思惟の、願いがこめられている、ただ私達は、それに気づかない」（無眼無耳人）と詩っております。正しく空氣の中にありながら空氣のあることに気がつかない私達のようなものであります。仏様の限らない命、それが五劫思惟のご本願の力。本願業力^{ゴザツ}とも申しますが、あみだ様の一切をいかし、一切を發展させようとする根本の願いの力、その本願の力、本願業力の働きと、そのように私達は仰いでいるわけであります。この本願業力こそ私達の身体の中にあります、「生命の永続」どこまでも生きようとする強い力と、それから「生命の拡充」の力、どこまでも自分の命を伸ばし、より広げていこうとする力。この二つが根本的な生存の本能で、生命欲求ともいわれております。生命に備わる強い欲求の力で生命本能とも申しますが、その二つは、実はこのような仏様の本願業力^{ゴザツ}の現われであるといわざるを得ないと思います。もう一度ここで先ほどの片手の声、隻手の音声を聞いてみましょう。この片手がここにあるということ。これは佛教大学で四条センターを作った下さったおかげである。又昨日用があつて私が来る

なら序にといっちゃわるいがどうか半日をさいて一時間か一時間半程お話をしてくれといわれなければ、お話ができません。又そのご案内を受けて皆様がこうして朝早くからお出かけ願わなければ、私がここに手をあげていることもできない。皆様がいないのに一人でこうやっても氣違いじゃないかと思われるだけでございます。そのような諸々の縁、無限の時の流れと無限の空間の広がりの中、この宇宙の無限の生命の力にささえられ、空氣や地球の引力や時間や空間やそのような一切のお恵みの中で、どこまでも生きよう、どこまでものびよう良くなろうという本能的な生命の力に恵まれて、始めてこの手のありうるといふことがいえると思います。私を生かす力に恵まれ、私のまわりにある力に恵まれ、諸々の衆縁和合の上に始めてここにありうるのであります。このことに気がつきました時、実は仏となり、仏を行する、仏作仏行ということができなくてはならないはずであります。すべてをいかし、のぼさうとする仏のみ心にそいまして、仏のみ心に生きる働きをこの手があらわさなければいけない。この手が人の懷の中に入つて財布をぬきだすのでは仏様ではない。人を助けるた

めに働きて始めて仏様の信心を帯して、この手が働いているということになります。そのような時にこそ始めて白隠さんの片手の声を聞きえたと言ひ得なくてはならないでしょうか。勿論、それでも足りないでしょう。本当にそれが、そのように思っただけでなくて、そのように全身全霊をもつて、その力に生き得たときに、始めて禅の「見性成仏」、あるいは密教の「即身成仏」、仏性を見極め仏になる、あるいは即身成仏、この身このままが、そのまま仏と成りうるといふ、そういう教えがこのような考え方から現われてきたといえると思います。そのことに気が付きますときに、始めて禅や密教のこのような教えのものと根本が皆さまにもおわかりになっていただけたのではないかと思います。しかし、そのようなことを悟ったから、それで果して仏に成りうるでしょうか。このような深い自分自身に対する反省、宗教的な反省の上に法然上人は始めて悟りから救いの教えに移られたのでした。法然上人は真心をもつこと、深い心をもつこと、そして回向発願心^{ゾウ}の三つの心をお説きになりました。真心（至誠心）をもつて深い心をもつというのは、第一には自分自身を見極めることです。そうして見

極めていけば、そこに己れの救われがたい愚かさに気付きました。またそのような自分をも生かし救つて下さる仏様の尊いお救いの力をみいだすことができるのです。仏様の威力によらなくては、私達は到底成仏することはできない。仏様のお救いに与かることが私達の生き方でなければならぬ。そして、そのようなことを願つてそのように生きていくのが回向発願心^{ゾウ}でございます。この三つの心をお説きになったのも、正しく悟りから救いの宗教へ、解脱から救済の宗教へと法然上人がお移りになったことを示すものでありまして、正しくこれまでの宗教から百八十度の転回を遂げたものといふことがいえると思います。悟りによつて仏となることが、到底なしえないという深い自己反省と宗教的な呼びかけから法然上人は出発したといわざるをえません。それまでの仏教というのが常に眞実なる自己を求め、それが仏性を窮めるための智慧をみがき修道を追求することによつて得られるとして、そのために最高の教えを求め、最高の行法を求めたのでありましたが、法然上人は、そうした自己の尊厳にめざめて仏となり、悟りを開くことの到底なしえない愚かな自分であるという自己の姿

を深く反省するところから出発したのであります。確かに、今この私の生きえているという、ありがたいこの事実の中に、私達は、一切を生かし一切を育てたもう、限らない命のみ仏、つまり無量寿無量光のあみだ様の本願のお力によって生かされてゐる、この不思議さに気付かして頂きながら、しかも、なお相変らず貪ぼりや怒りや愚かさという三毒、の貪瞋痴の三熱惱の炎に焼かれ、底知れない欲望の海に流されて、所謂罪惡生死の海に浮き沈みしている、愚にして愚なる自分をふりかえりますときに、お釈迦様が説かれたような、自らのよるべき島を掴むことが大切だ、浮き沈みすることではないんだと説かれましたお釈迦様の教えのように、本当の島を求め、拠所を求めていかなければなりません。救われがたい、この私達凡夫、凡庸な人間が救われ得る教え、それを法然上人は、上人のお父様の遺言によりまして、敵も味方も、男も女も、富める者も貧しい者も、老いたるものも若き者も、木こりや菜摘み、すなど（漁）の人々、これらすべてが救われるべき救いの教えを求めるといふ御遺言によって、そのすべての人々の救われる道を、この愚かなる自分の中に仏の力を頂きなが

ら、仏様になりえないような、この愚かな者、いつでも三毒の煩惱におし流されている自分自身を深く省みて道を求められたのであります。傳教大師様が比叡山に登られまして、二十一、二才の頃に書かれたとされます願文というのがあります。「愚が中の極愚狂が中の極狂、底下最澄」と自らおっしゃっておられるのです。どん底の最澄とさげびました。パウロもまた、ローマ人への手紙の中で「あゝ、我悩める人なるかな、この死の身体より我を救はんものは誰ぞ」と叫んでおります。このようなのが本当の宗教的な反省であります。本当に深く深く自分自身の姿を見つめた時に、自分の今までの生き方で果して救われうるでしょうか。法然上人もおっしゃっております。「然るに、我がこの身は、戒行において、一戒もたまたず禪定において一つもこれを得ず」と、嘆かれておるのであります。「如何せん、如何せんと、歎き歎き経蔵に入り、手づから自ら開きみて」、遂に善導大師の觀經の疏という書物の中の「仏様の本願によるから救われるのだ」（順彼仏願故）という御文につきあたられて、ご自身が、あみだ様の（仏様といつてもいいと思いますが）「我名を呼べ、さらば浄土に導か

ん」とたてられましたあ、みだ様の本願のそのお力につきあ
たられたのでございます。宇宙の無限のエネルギー、それ
は実は仏様の本願の力、すべてを浄土に導いてあげましょ
うという、この強い導きのお心、そのお心につきあたられ
まして、称名念佛によるすべての人の救われる教え、浄土
宗を開かれたのであります。そこに仏教が悟りから救い
へ、解脱から救済へと大きく転回した姿をみとめることが
できます。

「我れはこれ烏帽子も着ざる男なり、十惡の法然房、愚
痴の法然房が念佛して、往生せんというなり」と仰せにな
り、「五逆十罪を選ばず、女人闍提を捨てず。」闍提とは
イツチャンテイカの訳で一闍提ともいいますが、救われる
ことのできない成仏することのできない人という意味であ
ります。女人も、成仏できないような人も、すべてが救わ
れるのだ。それまでは五逆の者即ち五逆罪を犯した者は、
仏教から排斥されて、悟りをうることはできない。あみだ
仏も始めの誓願では、五逆の者をのぞきますよとおっしゃ
っています。五逆の者は除きますよとおっしゃったのは、五
逆を犯さないようにして下さいよ、ということでありまし

て、他のお経の中では、五逆を犯した人でも、あみだ様は
お救いになる。犯してしまったものは仕方がないと放って
了うのではないのです。犯してしまったものは、もう見捨
ててしまうというのではない、犯した者に対しても、救い
の手をのべてやる。しかし最初のご誓願をたてられた時に
は、そのようなことはないようにという願いの心を表明さ
れておるからでありまして、法然上人は正しく、「五逆十
罪を選ばず、女人闍提をもすてず」といわれました。その
ようにして、始めて女人正機、惡人正機、愚鈍念佛第一と
いうこの三本柱によって、法然上人は浄土の教えを開かれ
たのであります。それまでは比叡山でも、高野山でも女人
結果がありました。女人堂までしか女の人は登れなかった。
それでそのように女人成仏することに対しては懷疑
的でありましたのに、誰でもが救われるのだ、そのお心の
中には、男だから女だからということはないのだと説かれ
たのです。あみだ様のご本願の中に女の人は、男の人の
身体^{カラダ}になって極楽往生できるようにしてあげようというの
があります。これは、男女の区別をもたないということです。
インドでは女の方はやはり低く見られておりました。女の

人も男にまけない身になって、極楽に往生できるんだというのが転成男子の願いで、女の人が男の人になるというのが、本願のみ心でございます。又愚鈍念佛第一。自分ほど愚かな者はないという深い宗教的な反省にたつて、罪惡生死、正しく地獄に落ちる外はないもの、親鸞上人は「たとえ法然上人にすかされて、地獄に落ちて悔いることはない。何故なら、もともと地獄一定住処の身である」、「地獄一定住処ぞかし」と仰せになりました。だから、たとえば法然上人にだまされて極楽に生まれることができなくて、地獄へ落っこつたつて、もともとじゃないかということでございます。そのように仰せになりましたが、地獄一定住処である、われらの救いを深く信じ、大慈悲の本願を信じまして称名念佛、お念仏の中に極楽浄土に向けて生きていく道こそが、残された唯一の道だと、されたのでございます。通常親鸞上人のお言葉といわれております、「善人なお生まる。況んや惡人をや」という言葉も、実は法然上人のお言葉でございます。『歎異鈔』の中で、よつて、「善人なお生る況や惡人をやと仰せられしと云々」とありますが、この仰せられしは、親鸞上人のお話の言葉でございますから、

「だからそういう風におっしゃつたのでございます云々」とお話になっていらつしやるのですから、それはご自分が仰せられたのでは勿論ありません。法然上人が仰せられたのですよと、お諭しになつた言葉でございます。その証拠には歎異鈔よりも古い『口傳鈔』には、「本願寺の上人（すなわち親鸞上人）が黒谷の先德（法然上人）からのご相承として如信上人にお話しになつた言葉としてこの「善人なお生る況や惡人をや」と出ておりますから、明らかに、それは親鸞上人が法然上人からお受けになつた「口傳」である。口傳であるからみだりに言つて間違えてはいけません。法然上人も、いつもは「善人なお生る」じゃなくて、「惡人なお生る。況んや善人をや」とおっしゃつておられる。しかし本當の間違ひのない、浄土の教えの深い信仰者だという方に対しましては、「善人なお生る況んや惡人をや」であみだ様のお救いになるのは、私達のような惡人は他の道によつては、成仏することができない。救われることはできないのだから、あみだ様の名を唱え、あみだ様のお救いを信じ、そうして、あみだ様のお導きを願つて、お念仏の中に生きていく以外には、私達の生きていく道はない

のだと、そのように信ずることによって、悪人もまた救われるのだと仰せになったのであります。明年、総本山の知恩院で、第二世の勢観房源智上人の七百五十年の御遠忌がございますが、その勢観房源智上人は法然上人がお亡くなりになるまで、ずっとお傍についておられて、そうして法然上人の行状について心覚えを記されました、古い法然上人の御伝記『醍醐本』の『法然上人伝』といわれるものの中に、やはりこの言葉があります。「善人なお生まるとも悪人をやのこと、口伝これあり」と書かれております。

これは法然上人が本當の信者達に対して、悪人ということの間違えてはいけない悪人でも救われるんだから悪いことをしてもいいと思うような人には、そのように仰せになりませんでした。しかし宗教的に本當に自分は救われることのできないような、悟りを開くことのできないような人間だと思ひになる、自分は本當に悪い者だったと、お思ひになったものに対しては、み仏はみ救ひの手をさしのべて下さっているのだということの、お言葉としてお伝えになったのであります。悪人正機、女人正機、愚鈍念仏第一の、この三つの柱は法然上人の往生極楽の教えの中の三つの大

切な点であろうと思ひます。このようなご信念に燃えて、念仏一途に生きられた法然上人、お亡くなりになりますのが近づきました頃、ご臨終が近付きました頃に、ある信者が、法然上人に、このたびのご往生は決定けつじやうでしょうか。決定しているでしょうか。間違いないでしょうかと意地悪く、お尋ねになりました。法然上人は「私は、もともと極楽から来たのだから」とお答えになりました。佐藤春夫さんが『極楽から来た』として、法然上人伝を朝日新聞でしたかに連載したのは、このお言葉から、とったものであります。確かに、すべての人々、私もまた皆様も、すべてが、限らない命のみ仏の尊い生命を頂いて生まれ、死ねばその永遠の生命の世界にみ仏のみ救ひの中に生まるべきはずの身であります。それなのに、現実には、私達は、ともすれば地獄に向つてしか歩み得ない。餓鬼や畜生や修羅道に落ちいつて尚恬として恥ずるところのないような人が多くみられることは、なんとということでしょうか。そのような生き方を見ると、陥ち入りやすい私達、このような私達の救われるべき道、それはただひたすら一切を生かしたもうみ仏の救ひの本願を信じて、そのみ名を呼びながら、我が身の救い、

お護り、お育て、お導きを願って生きるほかはないでありましょう。中国の芭蕉山に（新羅の僧）の慧清禪師という方がありました。芭蕉和尚といわれております。この方が大勢のお弟子さん達にむかひまして「おまえたち杖を持っているか、持っているなら、わしの杖をやろう。持っていないなら、おまえの杖をとってしまうぞ」と話された。この自分の杖をやろう、もっていないねばとろうと。これは手に持っている杖のことではないでしょう。禅の人達が旅から旅へと修行するのにみんな杖を持っていました。山へ登るのにもみなさんが金剛杖をついて登ります。しかし、その杖のことではない。もっとだいな心の杖をやろうよ、といい、もっていないせんといえ、もっているじゃないか、おまえの心の杖をそれじゃとってしまうぞ。こういう風におっしゃったんだろうと思います。無門禪師はそこで「扶かつては過ぐ断橋の水」。「扶けては」とも「扶かつては」とも、両方の読み方がある。「扶けては」というときは、杖を主体にして、杖が人を助けてとなる。そうして「橋の断たれた水をすぎる」とこういう風に普通読ましているのですが、私は、これは詩であってそうではなからう「扶かつては過ぐ断橋の水、伴のうては帰る無月の村」こういう風

ては過ぐ断橋の水、伴のうては帰る無月の村」こういう風にふりかえて読むのではなくして、そのままずっと読むのが本当の読み方だろうと思います。「扶かつては」または「扶けては、過ぐ断橋の水、伴のうては帰る無月の村」です。月のない真暗な晩に村のあぜ道を歩いていけば、田んぼの中に落ちこちるかもしれないし、また道の中の石につまずいてころぶかもしれない。その時にも、杖一本あれば、ついて無事に帰ることができる。また橋のない谷川の急流の水を渡る時、ただ渡ろうとすれば深みにおしながされてしまいかねない。杖一本あればそれを力にして、その急流も越えることができる。そのように無門禪師が詩たわれているのでございます。『無関関』の第四十四則にある話でございますが、それと同じことを、実は私達の大学時分の先生松浦一先生。英文学者で白道の詩人、といわれた方がございます。本當に詩を読むような清らかな声で流るような抑揚をつけたご講義でございましたが、この松浦一先生のお歌に「生まれては野越え山越え旅路行く、人にたまいしみ仏の杖」とあります。この「み仏の、それこそは『お念仏』であると思います。念仏一筋の中に、み仏

の賜いしお念仏を唱えながら、その道一筋に生きて、み仏のお救いを育て、お導きを願って、一步一步、いつも極樂の方に向って生きていく。それが私達に許されました唯一の生き方ではないでしょうか。往生極樂につきまして、それは単なる来世信仰だ、弱い者の寝言であるというような、ひどい批評もございます。そうではありません。地獄に落ちることのないように、いつも極樂をめざして生きなければいけないぞと強く本当の生き方を諭されたのが、法然上人でありました。法然上人のお言葉の中に「一念に一度の往生をあておきたる願いなれば、念々ごとに往生の業となるなり」とあります。念々に往生の業となるのです。「念々歩々」という言葉がございます。一念に一度の往生はと説いておられる。念々に往生の業であります。一念一念、一步一步、それが念々ですね。一念一步、一念一步というみですね。本当に極樂へ向って歩み続け、最後にはどうぞ惡道に落ちる事なく極樂へ迎え下さいというのが、往生極樂の信仰であります。荒狂う瞋恚の炎、貪欲の水の川の間に挟まれながら一步一步お念仏の道一筋。それを白道、白い道と教えております。白い道をお釈迦様がその道

を辿れといひ、あみだ様がこの道を来いとおっしゃった、その道を生きていくのが、私達の本当の生き方だというわけであります。それにつきましては、本当に今のこの世の中、貪欲といひましようか、悅樂に満ちたまことに享樂的な世の中ですと、ともすれば私たちは、目前の悅樂を心の幸せと見あやまりがちでございます。物が豊かになればなるだけ、人々の心が物にばかり目を向けて、とかく心がおろそかになり、物質的な満足のみを追ひ求めて心の幸せを見失いがちです。社会福祉も生活上の充足ばかりに力を入れて、眞の安心立命などそっちのけになりがちです。物の福祉よりもっと大切な心の福祉をおろそかにしがちです。社会福祉の充実しているといわれる北欧の国などで却って老人の自殺などの問題がふえているそうです。そんな物の満足だけであつてはならないという、よい例です。ですから、そのような、おいしい物を食べ、美しいものを着、車を持ちまわし、住みごちのよい家に住みと、そうしたことだけであつてはなりません。本当の心の拠所、本当の人間としての歩みの仕方、その歩みの仕方の中に、毎日を生きていくように努めることが最も大切ではないでしょうか。榎本

(この稿は昭和六十一年十一月十三日、佛敎大学四条セ
ンターに於てのご講演録です)

栄一老人は「いちにちさまを迎え、いちにちさまを送り、
いちにちさまから法を聞き、昨日も今日も、いちにちさま
に育てられ」と詩っております。「無限の流れで」という
題であります。さらに「娑婆を行く」と題しまして、「浄
土をねがって、ゆく道中が、かたじけない。石ころの道も、
山坂も、道ばたに咲く花も」と詩っております。人生には、
石ころの道もあります。越えがたい山坂もあります。しか
しお念仏を杖として浄土を願っていけば、時にそのような
ものの中にも堪えぬいてゆく力がわいてくるでしょう。時
にみ仏は道端に美しい花を咲かして、私達を慰めて下さる
であります。吹く風も、輝く日も、照る月も、すべて
が、み仏が私達に真実の念仏のひととして生きるように、
とお諭しになっているみ声でありお姿であるとうけとるこ
とが肝要のことでございます。これが『観無量寿經』に説
きます浄土の有り様を見るところであります。どうぞ
毎日が皆様の上にみ仏、あみだ様の尊いお救いとお光が照
り、お導き、お育ての力が加わりますよう念じてやみませ
ん。ご清聴本当にありがとうございます。十遍のお念仏
を唱えて締めくくりにさして頂きます。